

はくさん

第3巻 第3号



ユキフミフカグツ

昔は、冬になると2kmばかり離れた白峰の村まで出るにも、カンジキをはくのが常であった。いまではどんなに雪が降っても、大型の除雪機のおかげで地下足袋でいける。

今年86才の風嵐に住む老人は、イロリにホエ（たきぎ）をたしながらかう語ってくれた。だから、いまはもう写真のようなユキフミフカグツもほとんど使われることがなくなりました。生きた民具がまた1つ姿を消したと考えるのは、豪雪地に生活したことの無い人々の感傷にすぎない、というのはいいすぎだろうか。

ユキフミフカグツの用途は、その名のとおり降りつもった新雪のうえを踏みかためて道をつけることにあった。その場合、このワラ製のクツだけでは雪中に深くしずんでしまって道ふみどころではない。そこで、写真にみるようにカンジキをつけるのがふつうである。

冬期、厳しい寒さの中で、背中をまるめ道ふみに専心している姿に、人々は叙情的なものを感じたかも知れない。しかし、現実には女性や子供たちにとって、決して楽な冬仕事の1つではなかった。

〈松山利夫〉

センター前に植物見本園と休憩園地完成する

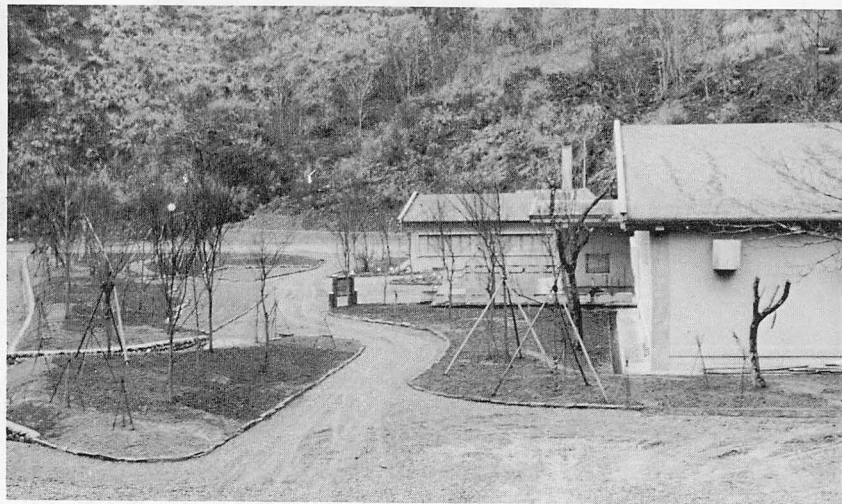


休憩園地とセンター

休憩園地へのつり橋



センター前の教化園地（植物見本園）



解 説

センター前と蛇谷対岸に、教化園地と休憩園地が整備されました。来シーズンから来館のみなさん楽しんでいただけるものと思います。教化園地は樹木を中心とした植物見本園として今後も整備を重ねてゆく計画です。

ライチョウ移殖をめぐる生態学的諸問題

1. 白山にライチョウはいたか

花井正光

はじめに

この夏、白山ではライチョウをめぐる話の話題がこれまでになく賑わいました。環境庁がライチョウを白山へ移殖するために調査を実施すると発表したのに端を発して、説明会が開かれたり、信州大学の羽田教授を団長に6日間の現地調査がおこなわれたりしたのが、遂一報道されたのでご記憶のみなさんも多いことでしょう。

現生息地において生存が危ぶまれているライチョウを、絶滅する前に他に適当な生息地へ移して、種の存続を図ろうというのが今回の移殖のねらいであるとされています。そして、移殖するさきには、以前ライチョウが生息していたのが何等かの原因で、とくに人間の作用によって絶滅してしまったところを選ぶのだともいわれています。つまり、自然の復元をも図るのだと言うことです。以上がざっとした環境庁の説明です。

これに対し、説明会では、現生息地での保護を強化することの方が先決だとする異論のほか、技術面での基礎的研究を必要十分条件

にした条件付き賛成論、さらには慎重論などさまざまな意見が出席した人達から提出されました。国立公園であるとはいえ、地元である石川県にとっては県民全体の公園である白山のことですから、移殖の実施については総意を得ることを前提にすると、環境庁が約束したのは当然のことでしょう。

ともかく、移殖を前提としながらも、調査はスタートしたわけですが、白山の自然保護を大きな柱にしている当センターですから、調査にも積極的に参加し、単に移殖の是非にとどまらず、ライチョウについての生物学的・生態学的な基礎資料をも集積して、ライチョウ移殖に関する県民の意志決定に役立ちたいとの考えから、調査団のメンバーに加わることにしました。

そんな訳で、ライチョウについての勉強が始まったのですが、本誌をとおして、それらのうちから読者のみなさんにも一緒になって考えていただきたい幾つかの問題についてふれてみたいと思います。

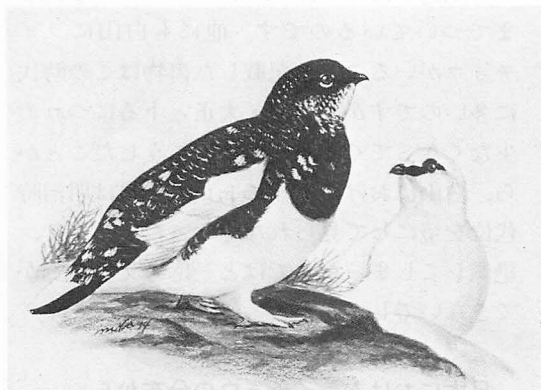


図1 ライチョウ（ともに雄）（「この鳥を守ろう」から転写）



図2 続白山紀行に画かれたライチョウ

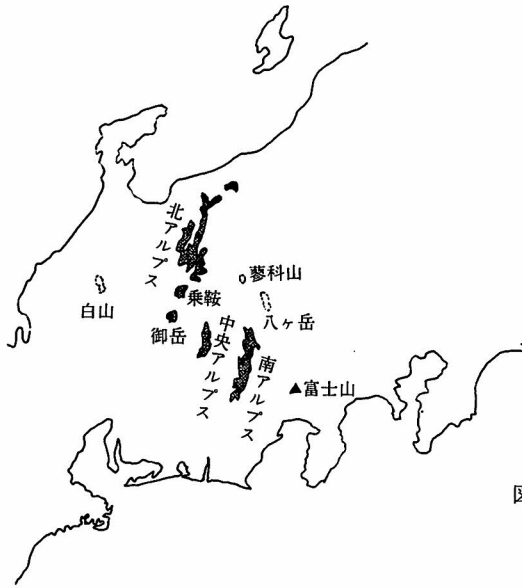


図3 日本におけるライチョウの分布概略図
(破線で囲んだ山岳に注目)

白山のライチョウ

もし、白山にライチョウがほんとうに生息したのだからとの疑問を口にするなら、おそらく多くの人からは、今さら何ごとだとお叱かりを受けることでしょう。白山のライチョウは、1200年に後鳥羽院の和歌に詠まれたのにはじまって、以後幾度となく書物に取り上げられてきたこともあって、人びとの間には、白山とライチョウとは切っても切れぬ間柄としてすっかり定着してしまっているように思えるからです。また、鳥類の分布を扱った現行の図鑑や事典の類でも、白山にライチョウはいることになっています。

しかし、一方では、現在はもちろん、昭和になった頃からライチョウの生息をはっきりと証明してくれる確かな証拠がないことも事実なのです。もっとも、最近でも時折目撃例が新聞ダネになることもあることはみなさんもご存じでしょう。あるいは、中にほんとうのライチョウを見た例もあったこととは思いますが、残念ながら客観的な証明となるものを欠いているのです。ですから、ヤマドリやホシガラスとの混同だと言い切る人さえ出てくる始末です。白山産であることがはっきりとしたはく製でも見つからない限り、過去にお

ける生息すら疑惑を免れないとすれば、白山にライチョウが棲んでいた事実には悲観的にならざるを得ません。県内はもちろん、県外でもここと思う所には尋ねているのですが、これまでのところ、そのようなはく製は見つかってはいないからです。

話は少し古くなりますが、江戸時代も後半になると、旅行が盛んにおこなわれるようになり、紀行文などがその分だけ多く残されたのも自然のなりゆきです。白山も例外ではなかったようで、「白山紀行」や「続白山紀行」などが、今でも目にふれるものとして残っています。実は、これらの書物の中にライチョウの記述があって、おまけにスケッチ(図2)までついているのです。他にも白山にライチョウがいることを記載した書物はこの時代に多いのですが、明治・大正と下るにつれて少なくなってくるようです。こうしたことから、白山におけるライチョウの生息は明治時代位を境に見られなくなった、つまり、絶滅してしまったのではと一応考えることができないでしょうか。

日本におけるライチョウの分布から

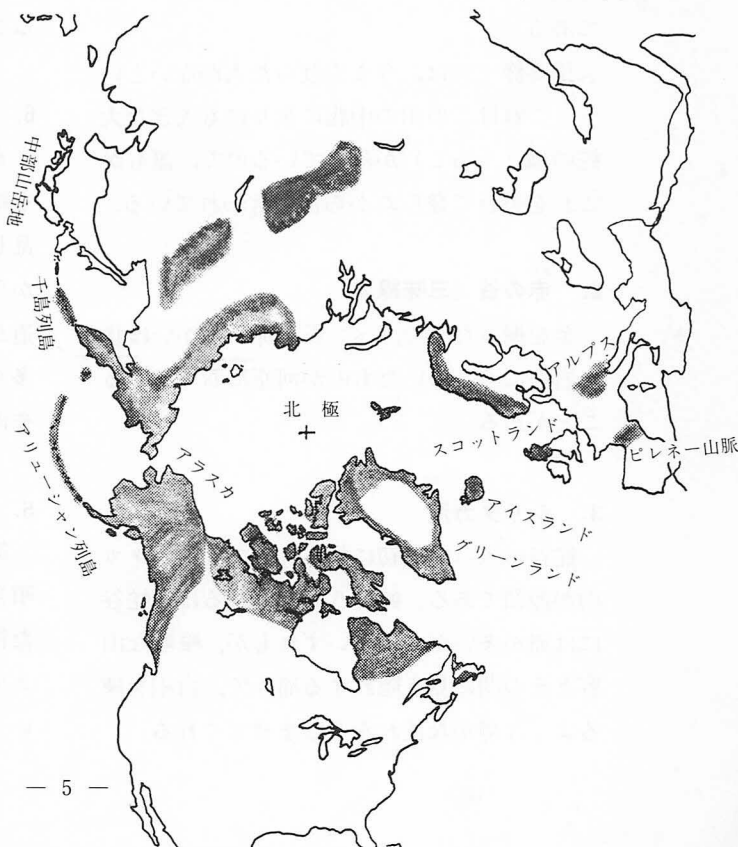
ところで、お隣の立山連峰をはじめ北ア

ルプスや中央・南アルプスには、正確な数は未調査ながら、まだかなりのライチョウが棲んでいる山やまがあります。その分布の概略は図3のようになります。いずれも、2,000 mをはるかに越える高山で、ハイマツ帯と称される森林限界の上部と、それよりもさらに上部の高山帯が発達しており、気候区分から言うと亜寒帯・寒帯に相当するところです。図からも判るように、その分布は、いわゆる中部山岳地帯にのみ限られています。富士山のほか関東以北には、同じ気候条件下にあって植生の上からもそう大きく違ってない山が点在しているにもかかわらず、ライチョウは棲んでいないのです。このあたりの因果関係ははっきりしていません。これとは別に、図で破線で囲まれた白山と八ヶ岳・蓼科山が、黒く塗り込められた地域からは、いずれも隔離されたところに位置しており、しかもそう広くない山塊であることに注意を払ってください。八ヶ岳と蓼科も以前にはライチョウが生息していたとされている山です。実は、こ

の図を画きつつ、中部山岳地帯を陸（大陸とは言えないまでも）とすると、破線で囲んだ3ヶ所は島に当ると考えられないだろうかと思いついたのです。もし、この想定が許されるとすると、白山からライチョウが姿を消した過程の謎解きができるように思えて、内心喜んだのです。次回からその謎解きにかかりますが、さてみなさまの納得を得ることができますかどうか。

残された余白を利用して、ライチョウが世界に広く分布している事実をお目にかけておきます(図4)。北極を囲むようにして分布のベルトがありますが、全体では25ほどの亜種で構成されています。日本のライチョウもそのうちの1亜種であること、ヨーロッパアルプスやピレネー山脈の高地にもやはりベルト地帯から離れて亜種がそれぞれ分布していることなどを図から読んでいただければ十分です。ライチョウが氷河時代の生きた化石であるとよく言われますが、その理由はもうみなさんにもお解りのことと思います。(研究普及課)

図4 ライツォウの世界分布
(北極を囲むように分布している)



蛇谷のみどころ案内

山本重孝

1. 猿ヶ浄土（浄土山）

白山自然保護センターの後にそぼ立つ山は断崖、絶壁それこそ人間の近寄れる地形の山ではない。猿ヶ浄土又は浄土山とはうまくつけた名かなと感心していると、この名の起りは別の意味があると聞いてびっくりした。

手前の途中谷からシリタカ谷までの間の山は藩政時代「おとめ山」といって禁猟区になっており誰人の入山も禁ぜられていたので、猿・熊・かもしかの天国であった。それから猿ヶ浄土又は浄土山という名がついたのである。ジライ谷には火薬の原料になる黒鉛があり、アカチ谷では金が採れた。加賀藩では幕府にわからぬように、薬用になる猿を増殖するために「おとめ山」にするという名目で誰人の入山をも禁じ、秘密の保持にあたったのである。

猿ヶ浄土へは、今まで登った人がないという。これはこの山の中腹に余りにも大きな大蛇の鱗（うろこ）が落ちているので、誰もがこれを恐れて登らぬからだと言われている。

2. 赤の谷（三味線滝）

金を掘った所で、ベン石（赤石）がいぼ状に岩石にくっついたものが河原におちていることがある。

3. シリタカ滝

蛇谷へ入って最初に見る大滝で、シリタカ山が源頭である。蛇谷八滝とされるほど蛇谷には滝が多いが、そのいずれもが、峻険な山容とその間に見え隠れする滝々で、白絹を練るような静かな流れを楽しませてくれる。

4. 岩底の滝

滝の上に直径2m位の笠形の淵があり、それは10m位の立木を入れも沈んでしまうほどの底無し淵だといわれる。修験者はこの滝から尾根伝いに仙人窟に登り修業する。女人禁制の聖地だったともいわれ、この淵まで登った女が神罰をうけて淵に落ちて死んだという話が残っている。

5. かもしか滝（五重滝）（トークズレ滝）

このあたりは、かもしかの生息密度が日本一といわれる地区で、それに由来してかこの名がある。修験道の盛時には「五重の滝」と呼ばれていた。滝の上方の岩盤は砥石になるので「トークズレの滝」とも呼ばれている。この滝の周辺ではニッコウキスゲの群生も見ることができる。

6. 姥ヶ滝（親谷の滝）

もとは親谷の滝と呼んでいたが、仙女が庵を結んで出沒したとか、老仙女が白髪をふり乱して滝水でくしけずっていたとかいうことから姥ヶ滝と呼ぶようになった。スーパー林道から滝の下に降りる道がつけられており、多くの人が利用しているが、早春の雪溶け時や雨の後には美事な滝となる。

8. 親谷の湯（ドスの湯）

第二号トンネルの下あたりに川底から出る噴泉があり、これを近くの岩盤に自然に出来た浴槽に引湯して、昔から飛弾の人達が山越えて湯治に来ていた。どんな業病でも癒えるというのでドスの湯と呼ばれている。林道工事

のため昔の姿は見られないが、復元して現代的に利用活用したいものである。

9. 尉ヶ滝 (水法の滝)

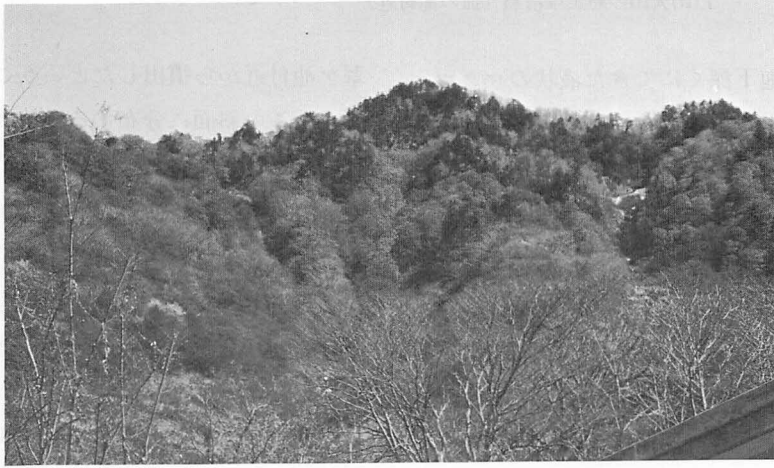
第二号トンネルを抜けた所に位置し、頭上に広がる雄大な滝である。水法の滝と呼んでいたが、姥ヶ滝の向いであって、男性的な姿であることなどから、姥に対して尉とされ、

この名で呼ばれるようになった。

10. 瓢箪の大滝

国見谷の断崖より80m直下する豪壮雄大な滝で、そのスケールは蛇谷随一である。加賀側から蛇谷を登るには、ここで行きどまりであった。

(郷土史家)

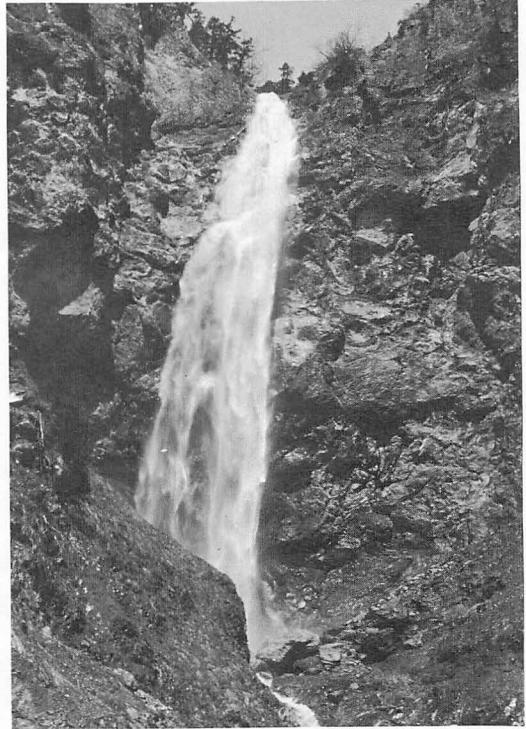


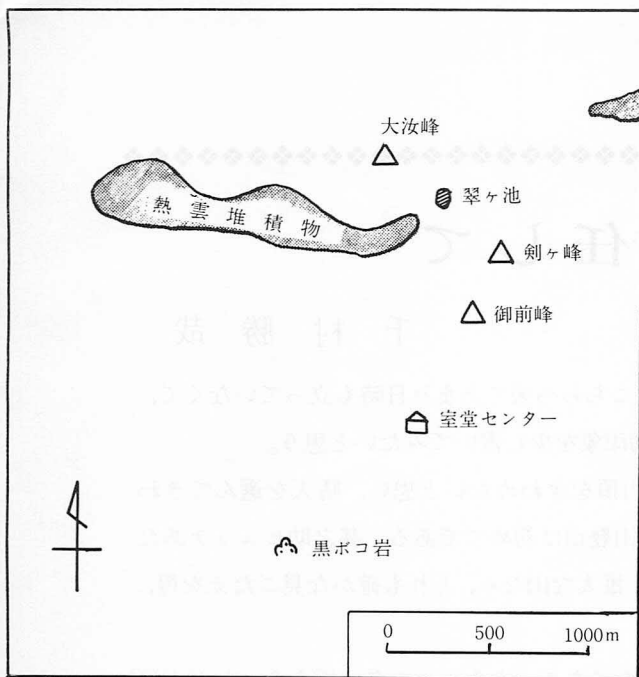
猿ヶ浄土

姥ヶ滝



瓢箪の大滝





白山火山の熱雲堆積物の分布（山崎等，1964より）

らぬけでることはできません。なにかの機会にそのマグマが水蒸気などを含んだまま地表にでると、地下にあった時のようにおさえつけるものはなくなり、水蒸気などのガスはいっせいにマグマからぬけだします。ビールやラムネの栓をぬいた時にでる泡のように。火口付近には、マグマからぬけだした高温のガスのかたまりが瞬間的に発生します。このガスのかたまりと、ガスがぬけでることによって様々の大きさにちぎれたマグマの破片とが、いっしょになって山腹をなだれのように



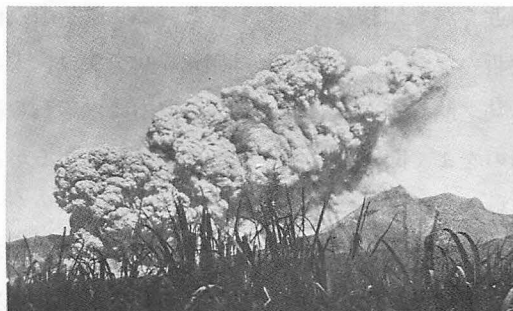
モンブレー火山の熱雲によって運ばれた巨礫。前回の黒ボコ岩とくらべて下さい。（ペレー，1937より）

に流れます。これが熱雲とよばれているものです。ガスが一種の潤滑剤の役目をして、その速さは大きく、時速数10kmにも達するといわれています。これが通りすぎた後には、マグマの破片である火山灰や巨大な礫が残されます。

熱雲はその構成物、流出速度からわかるように、それが人里を襲った時の被害は大きいものです。モンブレー火山の熱雲の噴出によって、山麓の港町サンピエールが3万人の住民とともに焼きつくされたことは、火山災害としては有名です。

他に、白山頂上部付近にこのような熱雲堆積物の見られるのは、お花松原と前回取り上げた黒ボコ岩付近です。黒ボコ岩付近は風化が進み土壌ができ、植物が多く生育しているため、その堆積物の様子を詳しく観察することはできません。今回取り上げた場所のものよりかなり以前の噴火の堆積物と考えられます。

白山火山に、何度か熱雲が発生したということ、私達は記憶にとどめておきましょう。
（研究普及課）



モンブレー火山の熱雲
（ペレー，1937より）



自然公園指導員紹介

—木下道夫—

4月27日の春山開きから、11月4日の秋山閉山まで、今年の白山登山者の数は27,004名だったと言うことです。閉山の後、下山されて間もない室堂主任、木下さんをお勤め先の白山比咩神社にたずねた際のお話でした。木下道夫さんは、白山観光協会に席をおかれ、山が開かれている間を通じて、室堂センターで登山者への宿泊を世話されるほか、山での事故防止のための安全指導をなさったり、遭難者がでた時には最前線で捜索にあたられたりするなど、文字どおり現場の自然公園指導員でもあられるのです。

木下さんが一等お忙しいのは、一日の登山者数が2000名を越える7月下旬の土日曜です。これらの日にはたいへんな混雑ぶりだそうで、トラブルのないようにとの気遣いが、木下さんにとって一番の苦勞のたねであるようです。昭和44年からお始めになったのですが、登山者の方は年をおって増加しており、それだけお仕事も確実に忙しくなっているわけです。もっとも、この時期には、兵隊と呼ばれならわされているアルバイトの室堂員が50人ほどになるのですが、これらの人達の監督もそれだけ増えるのですから、たいへんなのには違いありません。

自然公園指導員としての木下さんは、山からゴミを追放することにも関心をおもちで、本誌で国立公園管理員の千村さんが白山についての印象で語ってみえますが、白山にゴミの少ないのは、実は、あれこれ現場で対策をお考えの結果を示すものなのです。白山がまだ歩いて登る山であることが、登山者のゴミへの関心をより昂めているのではと、木下さんは分析してみえます。

木下さんの高山での生活は、一年の半分にも及びます。従って、生理的にも高山に適応して変化するなど、「高地民族」としての医学用モルモットだと笑いながら話してくださいました。さしずめ天上びとといったところでしょうか。また、山で見ることのできる雲に興味をおもちで、写真も多く撮って見えます。下の写真はそれらのうちからお借りしてきたものです。きっかけは、登山者から天気の子報をしばしば強いられることから、雲が天気の子報になるのではとの思いつきだったそうで、その甲斐あってか、子報の多くは当るようになったとのこと。



翠ヶ池と積乱雲

(原図はカラーでみごとな写真です)

たより

- 今号は、また、雪に追われるようにして引越してきた冬季庁舎からお届けします。この夏は、残暑が異常にながびいたのをみなさまもご記憶のことでしょうが、こんな年の冬には大雪になるのだと話がしきりに聞かれたものでした。さてこの冬の雪はどんなものでしょうか。たいしたこともなく済んでくれることを祈っている昨今ではあります。
- 当センターの水野昭憲さんは、この10月からアマゾン川の源流域で、広鼻類の調査に従事しています。彼からの最近の便りでは、これからが夏の乾期に向うとのこと、さすがに地球の裏に位置する遠い国を想わせます。帰国した際には、本誌でも、珍しい話を紹介してくれるものと思います。ご期待ください。
- 11月12日、スーパー林道の完工式がおこなわれました。使用開始は、52年度までの各種整備工事が終わった後になるとのことらしいですが、自然破壊がこれ以上拡大することを防ぐのに、最善の注意が払われるよう、管理運営についていろんな方面からの模索が必要だと考えられます。
- 山日記の執筆は、この10月から白山に赴任された千村さんをお願いしました。次号以降も、国立公園管理員としての立場から、いろんな意見を投稿していただけることになっております。なお、前任の西塔紀夫さんは、日光国立公園へ転任されました。

目 次

ユキフミフカグツ	松山 利夫	1
グラビア・センター前の園地整備		2
白山にライチョウはいたか	花井 正光	3
蛇谷のみどころ案内	山本 重孝	6
白山火山 2 熱雲堆積物	東野外志男	8
山 日 記	千村 勝哉	10
自然公園指導員紹介—木下道夫さん		11
た よ り		12

はくさん 第3巻 第3号

発行日 1975年12月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村市原
印刷所 株式会社 橋本確文堂